



各家庭の協力を得て  
今後もぜひ続けていきたい

世話人 松下 己喜男さん(82)

子どもの頃、ガルどんは「ヒョーヒョー」と鳴くんだと祖父に教えられました。旧暦5月16日頃になると鳴き声が聞こえるんです。すると祖父が「己喜男、ガルどんが下らっど」と言っていましたね。市口地区のご家庭の協力をいただき、今も行事が続けられるのは、大変良いことだと思っています。子どもの数は年々減ってきていますが、地域に子どものいる限りは、水難事故防止を願って今後も続けていきたいと思っています。



←ワラツト

## ガルどんの

## ダゴ流し

いちき串木野市／市口地区・五反田川河口

### カッパの好物を川へ供え

### 子どもの水難事故防止を祈願

旧暦5月16日の夕刻、いちき串木野市北浜町の五反田川河口に子どもたちの声が響き渡ります。「ガルどん、ガルどん、ジゴを抜つきやんな」「事故がないようにお願いします」「川に引き込まないでください」……。子どもたちはそう唱えながら、ワラに包まれた団子を川へ投げ入れます。

「ガルどんのダゴ流し」は、いちき串木野市の市街地にほど近い市口地区に受け継がれる伝統行事です。「ガルどん」は方言でカッパ、「ダゴ」は団子の意味。米粉や小麦粉で作ったカッパの好物の団子をワラで包んだ、長さ40センチほどの「ワラツト」を、旧暦5月16日の夕刻に子どもたちが五反田川へ投げ入れ、水難事故がないことを祈ります。

ダゴ流しの世話役を務める松下己喜男さんは、子どもが水難事故に遭うのはカッパが子どものジゴ(尻)を抜いたり、足を引っ張ったりするからだ、と船大工だった祖父から教えられたそうです。鹿児島では、旧暦5月16日は水神様

鹿児島には、古くから受け継がれてきた個性豊かな祭が各地に残っています。

今回はそんな祭の中から

いちき串木野市に伝わる

「ガルどんのダゴ流し」をご紹介します。

を祭る日であり、カッパが山から下りてくる日とされていました。この時期の五反田川は夕刻にちやうど満潮を迎えることから、行事を通して潮の満ち引きを子どもに教える意味もあつたようです。

ダゴ流しは戦中から途絶えていましたが、昭和46年の台風19号でこの地域が水害に見舞われたのを機に、昭和47年に松下さんが市口地区の子ども会に呼びかけて再開しました。かつては五反田川沿いで家庭ごとに行われていたダゴ流しも、今に受け継ぐのは市口地区のみ。そこには子どもの無事を祈る大人たちの優しい気持ちが込められていました。



### いちき串木野市

いちき串木野市は平成17年10月に串木野市と市来町が合併してできた、総人口30,536人(平成24年3月末現在)のまちです。薩摩半島の東シナ海側、吹上浜の北端に位置します。つけあげやかまぼこ、サワーポメロやボンカン、ちりめん、焼酎などが特産品として知られる同市は「食のまちいちき串木野」として食に関する取り組みを進めています。写真は羽島にある「薩摩藩英国留学生渡欧の地」。幕末にここから19名の若者たちが英国へ旅立ちました。